『DEATH NOTE －the Near relative－』

kirsche.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『ＤＥＡＴＨ ＮＯＴＥ －ｔｈｅ Ｎｅａｒ ｒｅｌａｔｉｖｅ－』

【Ｎコード】
Ｎ９１６９Ｄ

【作者名】
ｋｉｒｓｃｈｅ．

【あらすじ】
とある死神の提案。物語はそこから始まる・・・。

【 piece. 1 提案 】

【 piece. 1 提案 】

死神界・・・

まるで悪夢をそのまま具現化したかのようなその空間は、薄暗く、空気はよどみ、死臭が漂う。静寂の中に時折、椀の中を髑髏が転がる音と、奇妙な笑い声が響き渡る。

物陰には生きているのか死んでいるのかも分からない死神が5匹、目を閉じて横になっており、微動だにしない。そんな中、1匹の死神が口を開く。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・おい、誰か何かしゃべろよ」

その死神の呼びかけに、他の死神が面倒くさそうに目を向ける。

「チッ、うるせーな…。なんでお前のために俺がしゃべらなきゃなんねーんだよ」

「全く…、どいつもこいつもだらしねぇな…。ま、他人のこと言えたもんじゃないがな」

「だな」

「クカカ…」

その笑い声に残りの死神も目を開き、身体を起こしてあぐらをかく。

「ったく、何がそんなに楽しいんだ？」

死神は笑うのを止め、急に神妙な顔つきになる。

「ん、どうしたんだ。急に真面目そうなツラしやがって」

「…俺らもアレ、やってみないか？」

「あん？　“賭け”のことか？　ケッ、いつの時代も変わんねぇなー、死神の遊びなんて・・・」

すると他の死神が身を乗り出してきた。

「でもまさか俺らみたいのが普通の賭けをするわけないよな」

「ああその通りだ。普通の賭けだったら、俺らがやる必要が無ぇ」

「…で、どうするんだ？　何を賭けるか考えてもいないのに『賭けをやろう』なんてお前が言う筈が無いからな」

「俺は何を賭けるかじゃなく、罰ゲームを何にするかを思いついたのさ」

「…ほう？」

死神の提案に、みんな興味を示したのか、いつの間にか円形に並んで座っていた。

「俺らのグループは全員…まぁ偶々だがな…、余計にデスノートを持ってる。拾ってもわざわざジジイ（死神大王）に返しに行くような連中じゃないからな。だから賭けに負けたやつはデスノートを人間界に落とすのさ」

「どういう意味だそりゃ？　人間界にデスノートを落として楽しむのか？」

「いや、デスノートを落とした場合、その所有者に死神が憑かなきゃいけねぇだろ？」

「・・・まぁそれは掟だが、俺らにとっては何の損得も無ぇじゃんか」

「ああ。だから俺らにとっては関係無ぇのにやらなきゃいけねぇから罰ゲームなのさ…」

するとようやく死神達はその提案の真意を理解したらしく、それぞれニヤリと笑みを浮かべる。

「フハハ…、こりゃ確かに面白そうだ」

「言いたい事は分かった。そんじゃ、誰からやる？」

「じゃあまず俺からやるぞ。“チンチロリン”でいいな？」

「おっ自分からやるなんて珍しいな、ホーイック」

するとホーイックはほくそ笑みながら言った。

「そうでも言わねぇと誰からも始まらないだろ」

死神達は顔を見合わせた。

「「そりゃそーだ！　ギャハハハハハッ！！」」

すると死神達がどこからともなく、骨を削って作ったイビツなダイスを三つと椀を取り出した。

「んじゃやるぞ」

ホーイックがダイスを椀の中に投げ入れるように転がすと、ダイスは勢いが強くそのまま椀の外へ飛び出してしまう。それを見て他の死神達は一斉に甲高い笑い声を上げる。

「チッ、ションベンか。冴えねーな…」

「ヒャハハハハァ！　いきなりチョンボかホーイック。これで決まりだな！」

「さすがホーイック。空気読むのうまいねー！」

死神達は笑いながらホーイックの肩をポンポンと叩く。

ホーイックはチッと軽く舌打ちをしてから小さくため息をつく。しかしいちいち言い訳するのも面倒くさかったので、懐からデスノートを取り出した。

「へいへい。うーん…、じゃあこっちのノートでいいか。ほらよ」

ホーイックはポイっと、デスノートを死神界の穴から人間界へと捨てた。

バサっと音を立てると、ノートは腐るほどの数の人間が蔓延る世界へと落ちていった…。

次回【 piece. 2 再臨 】

【 piece. 2 再臨 】

西暦２０１３年。
夜神月による人類史上最凶最悪の事件、すなわち“キラ事件”が終結してからもう3年以上の月日が流れていた。事件終結直後は多くの犯罪者予備軍はキラによる裁きを恐れ、身を潜めていた。しかし、犯罪者が死ななくなってから1年も経過すると、犯罪者が一気に急増した。しかも抑圧されていた反動か、その増加率は過去に類を見ないほどの上昇率を示した。
しかし、増加していたのは犯罪だけではなかった。テレビなどでは報道されないようないじめや恐喝などの件数も増加していたのである。

東京の繁華街のとある一角。大通り沿いのビルとビルに挟まれた小さな路地裏で、一人の少年が、数名の不良グループにからまれていた。

「なあお兄さん。僕達ゲーセンで遊ぶ金が無くて困ってるんだよ。助けてよ、ねえ？」

「その、僕お金持ってないし、困ります…」

するとグループの中の一人が少年のみぞおちに膝蹴りを入れる。

「うぐっ、くぅ…」

少年は身体をくの字に曲げ、ガックリと膝をつく。そして、助けを求め視線が大通りの方を彷徨う。しかし、何人かの大人と目が合ったが、少年が不良グループにからまれている事に気付くとバツの悪

そうな表情を浮かべ、そそくさと歩を速めて視界から消えていく。

「オイ、何オモテ見てんだコラ。どうせ助けなんて来やしねえよ！」

「そ、そんな…」

男は倒れている少年の横から腹部に蹴りを入れる。その間にグループの別の男が少年の鞄を物色し、中から財布を取り出していた。

「おっ、あるじゃん金。これで遊べるぞ」

少年は倒れたままの姿勢で財布を持つ男を見上げる。

「ああっ…」

「ああ、じゃねえ！」

男は再び少年の腹部に激痛を加える。

その時、大通りをたまたま歩いていた男が異変に気付き、路地裏へと駆け込んできた。

その男は松田桃太であった。

「お前達、何をやってるんだ！」

不良達の視線は一斉に松田に注がれる。

「なんだてめえ？」

「弱い者いじめなんて駄目じゃないか！」

「うるせえよ。てめえも死ぬか！」

「僕は警察だぞ。お前達、全員補導する！」

松田は内ポケットから自分の警察手帳を取り出すと、不良グループに向かって提示した。

「警察だって、どうする！？」

「そ、そうだな。金はもうもらったし、とっととずらかろうぜ！！」

「ああ逃げようぜ…」

すると不良グループ達は松田とは反対の方向へと向かって一斉に走り去る。

「あ、待て！！」

松田はすぐに追いかけようと二、三歩走り出す。しかしすぐそばでボロ雑巾のようにうずくまっている少年に気付き歩を止める。

「あ、君、大丈夫？」

少年はよろよろとよろめきながら、松田の手を借りて立ち上がった。その瞳には悔しさと涙で滲んでいた。

「ありがとうございます…」

「まったく、こんな昼間から何て酷い連中だろ」

「昼も夜も関係ないよ。僕に気付いた人はたくさんいたのに、誰も僕を助けてくれなかった。僕を助けてくれたのはキラ様だけだ」

「キラ様？」

松田はきょとんとして、思わず少年の顔を覗き込む。

「はい。キラ様が犯罪者に裁きを下していた頃は、みんなキラ様に殺されるのを恐がって、恐喝やいじめはほとんどなかった。なのに最近、ああいう連中がのさばってる。恐喝されたのだって今月に入ってもう二回目。ああ、キラ様さえいてくれれば…」

「でも、僕みたいに助けてくれる人だって中にはいるし…」

「警察の人だからでしょ。仕事だから僕を助けてくれただけでしょ…」

「そんな、君…」

松田が話し掛けようとした時、少年は自分の鞄を肩にかけ、大通りに向かって歩き出した。

「僕これから塾があるから行きます。ありがとうオジさん…」

「オ、オジ……って…」

松田が言葉に詰まっていると少年は駆け足で行ってしまった。松田だけがその場に残された。

『キラ様さえいてくれれば…』

さっきの少年の言葉が甦る。そして次の瞬間、夜神月の顔が脳裏によぎった。

「月君、君のしてた事は、間違ってなかったのかな…」

ふと松田はＹＢ倉庫での月の言葉を思い出した。

『松田、お前だけは理解してたはずだ！　キラが正義、キラが必要！　撃て、ニアを、ＳＰＫを、そして相沢達を撃つんだ！！』

あの時の月の台詞は正しかった。松田はキラが正義なのではないかと考えていた。しかし悔しかった。悔しくて、涙が溢れた。それは自分が信じていた月が、自分にまでキラの正体を隠していた事に対してだった。もし事前に月が、自分だけにキラの正体を打ち明けていてくれたなら、自分はニアを撃っていたかも知れない。そんな風に松田はふと考えていた。

松田は、何となく寂し気に肩を落としながら路地を出て行こうとすると、胸ポケットの中の携帯が小さく振動しながらプルルル…と無機質な電子音を響かせた。松田は携帯を取り出すと、背面のディスプレイを確認する。そこには『捜査本部』と表示されていた。

「はい、こちら松田です」

『松田、今大丈夫か？』

その電話からは相沢の声が聞こえてきた。

「はい大丈夫です」

『そうか。緊急事態だ、大至急捜査本部に来てくれ』

「了解しました。で、何があったんです？」

すると電話の声のトーンが幾分低くなった。

『いいか、落ち着いて聴けよ。キラが現れた…』

「えっ、キラが！？」

『馬鹿、声が大きい！！』

「あ、すいません…」

松田は条件反射のように思わずペコリと頭を下げる。

『詳しくは直接話す。とにかく大至急本部へ来い！』

「はい、分かりました！」

松田は携帯を切ると胸ポケットにしまう。

（キラが現れたってどういう事だろ。まさか…）

松田は捜査本部へ向けて全速力で駆け出した。

次回【 piece. 3 十三 】

【 piece. 3 十三 】

新たに犯罪者が心臓麻痺で倒れていくという事態は日本のごく一部に知れ渡った。
それを知ったキラ信者は今度こそキラの復活だと驚喜したが、キラ否定派の人達はその存在をまだ疑っていた。
今までも、犯罪者が心臓麻痺で死亡する度に、キラ信者のブログやB級雑誌などで『キラ復活』などと書かれることはあったが、それもほんの数件の心臓麻痺では、すぐにキラ否定派にもみ消されるのがオチだったのである。
そのため、世界の情勢はまだキラ否定派の意見が優勢であったと言える。

『おい、ニュース見たか？』

『あっ知ってる！　また４人もの犯罪者が心臓麻痺だって・・・』

『やっぱキラって復活したのかな！？』

『本当にそうだろうか？　キラを模倣した大きな犯罪集団の可能性だってまだあるだろ』

『そうかもしれないけど・・・私はキラ様に復活して欲しいな・・・・・・』

『まだ１０人くらいだろ？　それにその情報もガセかもしれないじゃないか。ニュースのソースを出せよ』

インターネット上ではそんな会話が囁かれていた。

２０１３年になり、世代が移り変わると、携帯電話やパソコンを使わない人はほとんどいなくなり、自分のホームページやブログを持つことも不自然ではない時代となっていた。そのため、携帯電話やパソコンを使う年齢層の拡大、世界各国の人たちとリアルタイムで話しながら同時通訳をしてくれるサービスなどの普及により、人と人との交流の円滑化が進んだ分、『憎たらしい』『殺したい』と思う人間も増えてしまっていたのである。

このような技術の発展やサービスの向上は、キラにとって最適な環境であったと言えるだろう。政府や警察は益々インターネット規制が難しくなり、同時に個人情報の保護やパソコンのセキュリティはそれに追いつかないという、まさにキラの復活を待ち受けているような時代になっていた・・・。

信者に神と慕われ、世界中の政府や警察を震撼させるキラはいつの時代も『キラ復活！』『キラ参上！』というような看板をでかでかと掲げるようなバカな行動はせず、ゆっくりと、しかし確実に犯罪者を心臓麻痺で殺していくことによって、キラ復活を示すものなのである。

一般人や警察や政府は、キラを恐れながらも、少しずつキラに賛同していくしか、道は無いのだろうか・・・。

２０１３年１２月１３日　金曜日　　日本

「キラが現れたってどういうことですか！？」

駆け足で部屋に入るなり、すでに部屋にいた相沢、伊出、模木、山本を交互に見ながら松田はまくし立てた。相沢は事件に関する資料をめくる手を止め、松田に言った。

「松田遅いぞ！」

「はい、すいません…」

「まあいい・・・まずはこれを見てみろ」

相沢はモニターを指した。

松田はバツが悪そうに苦笑いを浮かべながら、自分より先に着いていた後輩の山本を一瞥してからモニターを見た。

「ここ数日間ですでに１２名。日本を含め、アメリカ、中国、ドイツ各国で均等に犯罪者が死亡している。しかも全て心臓麻痺でだ」

「キラ…、以前のキラによる殺人が無くなって以来、数日で十名以上の犯罪者が心臓麻痺で死亡した例はありません」

相沢の説明に模木が付け加えたが、松田の手前、『月くん』という言葉は使わず、『以前のキラ』としか言えなかった。しかし模木には、わずかに松田の表情が曇ったように感じられた。

「私はインターネットやマスコミの方を少し調べたが、この人数でキラ復活と騒いでいるのはまだ日本のごく一部だけのようだ」

「日本人はこういうのが好きだし…、そうじゃなくても前のキラは少なくとも日本の関東にいたことは世間に知れ渡っていたことっすからね…」

伊出と山本もそれに続いた。一方、松田は複雑な気持ちだった。

（…犯罪者を心臓麻痺で裁くやり方は月くんのやり方と同じ…。だけど“前のキラ”が犯罪者を心臓麻痺で裁いていたことは一般人も知っていること…。それ以前に月くんはもう死んでしまった…。これがデスノートによるものであったとしても、これは月くんではない…）

「…でもこのままじゃ、また…」

松田は月が好きだったが、キラに対する憎悪の念は人一倍強い。しかし松田は、“キラが現れたのならば、それは月くんであって欲しい”という自分の気持ちに自ら驚いていた。

「ああ。おそらくまた明日も犯罪者の裁きが行われるだろう。まだキラ復活だと騒いでいるのは日本のごく一部だけのようだが、今はインターネットによってあらゆる情報が世界レベルで共有されている時代だ。このままでは以前のように、世間がキラに賛同するのも時間の問題だろう…」

「……」

「…携帯とインターネットの普及が留まることを知らない今の時代では、オンライン上で自分のキラ否定論を述べることも簡単になり、キラがいなくなってから3年も経つとあの事件を冷静に分析する評論家もいる。しかし、ハッキングして名前と写真を公開すると脅されたり、実際にハッキングされて晒されてしまった人もいるようだ」

「…Lからの連絡は？」

「まだだ」

「えっ？」

「俺が気になってたのはそこなんすよ」

山本が割って入った。

「俺はLの正体なんて知らないっすけど、数日の間に12名の犯罪者が心臓麻痺なんて、キラの仕業に決まってるじゃないっすか！Lがこの事実を知らないわけがないから、つまり…」

「いや、知っているからこそ連絡してこないんだろう」

「？・・・」

相沢の顔が険しくなっていた。

「Lがキラなら一連の事件は成り立つ。そんなことは誰でも考えることだし、実際前のキラの時もそういう噂は流れた。だが俺がLでキラならLの正体を知っている俺達にはいの一番に連絡して所在を

掴むか真っ先に殺す。元ＳＰＫのメンバーも同じだ…」

（って事は、逆に言うと先輩達が殺されたらＬがキラ濃厚ってことっすか…！？）

捜査員達は相沢の話に聞き入っていた。

「Ｌとは普段、厳重に守られた通信回線を使って連絡を取っているが、それも絶対ではない。しかもインターネットを利用した緻密で凶悪な犯罪が年々増加している。おそらくＬは今現在、自分たちに関わる通信回線のセキュリティを格段に上げる必要が出てきて、その対応に追われているんだ」

「それに俺達の中にキラがいるかもしれないと考えている可能性も否定できないっすね……」

（…山本？…、それならば…。いや、だが…）

「…とにかく、今はあまり警察として目立った捜査はせず、インターネットとマスコミの動きを追い、一般人の騒ぎや乱闘が起きたらそれを沈めるなどの行動しかしてはならない。警察手帳を携帯するのは止むを得ないが、手帳を人に見せるような捜査はなるべく避けるべきだ。各自、注意して捜査するように！」

「はっ！」

「分かりました！」

相沢の号令により、皆は姿勢を正して返事をする。それを見て相沢は小さく頷いた。

（…そして私はこの捜査本部を取りしきる者として…、いやLからの連絡がいつ来るとも分からない。しかしLに断りを入れずに行動できるのは今だけとも言える……、ならばその……！）

不意に相沢の表情が一瞬緩み、瞳の色から輝きが失われた。そしてスクっと立ち上がるとコートを手に取り、扉の方へ向かって歩き出す。そして、ドアノブに手をかけながら言った。

「…みんなすまない。さっき指示した通り捜査を進めていてくれ」

「…相沢？」

伊出は不思議そうに相沢を見つめた。

「私は行かなくてはならない所がある。Lからの連絡が来るまでは具体的な捜査はできない。今日は適当に切り上げて明日、またここに集合してくれ」

「そうか、分かった…」

「了解しました」

そして相沢は一人、捜査本部を後にした……。

次回【piece.4 月光】

【 piece. 4 月光 】

２０１３年１２月１３日の夜。

クリスマスシーズンに差し掛かった街は、赤と緑のクリスマスカラーが散りばめられ、一年の内でも一際華やかさを放っている。深夜の０時を回っているため、人影はまばらで、イルミネーションの灯りだけが街を彩る。

とある桟橋を１台の車が通り抜ける。車内では若いカップルが楽しそうに笑い合っている。

「はい、あ～ん♪」

「あ～ん♪」

「どう？　どう？？」

「うん！　おいし～い☆」

「ホント！？　とっしーに喜んでもらえるなんてミキめっちゃ嬉しい～♪」

「う～ん！　ミキが作ってくれた物だったら何だっておいしいよ～☆」

「キャーもうとっしーったらぁ！　ウフフ♪」

「ハハハ♪」

その時、歩道をふらふらと覚束ない足取りで歩く人影があった。カップルはその異様な雰囲気に気付き、思わず車を停めて様子を見つめる。
車のライトが男の顔を照らすと、目は空ろで、口をだらしなく半開きにしている表情が見えた。

「とっしー何アレあぶなーい！」

「うわーマジ危ないね！」

「ホームレスかなぁ？」

「いや、その割にはスーツも小ぎれいだから、酔っ払ったサラリーマンか何かだよ」

「そっかー、さすがとっしー頭いいね♪」

「えへへ、大したことないよ～」

その次の瞬間、男はふらふらと橋の手すりにもたれ掛かると、そのまま橋から力なく落下した。

「キャッ！！？　うっ、嘘・・・」

「うわっ！！　落ちた・・・・・・」

「ど、どうしようとっしー！　ミキ怖い・・・」

「ぼ、ぼ、ぼ、僕が付いてるから…だ、大丈夫だよミキ・・・」

「どうする？　見に行った方がいいのかな？？！」

「そ、そ、そうだね・・・じゃ、じゃあ」

「やっぱ待って・・・たぶんあの高さじゃ助からないし・・・関わらない方がいいよね・・・ミキ怖いし」

「あ、うんうん。触らぬ神に祟りなしって言うし。か、関わらない方がいいよ・・・」

「・・・」

さらさらと流れる真っ暗な川の中、男は仰向けのまま浮かび、ただ川の流れに乗って下流へと流されていく。見開いた瞳はもう何も映し出す事はない。ただ月の光だけを反射させ、異様な光を放っていた・・・。

その翌日、あらゆる新聞の一面には次のような記事が書かれていた。

『犯罪者の心臓麻痺に加え、警察官が相次いで心臓麻痺！！』

『各国警察機関がコメントを拒否！！』

また、世界中の新聞やニュース報道ではキラ復活の文字が咲き乱れ、インターネットやブログでは一連の事件に関する書き込みが嵐のように交錯していた。

『私たち日本警察としては・・・一連の事件を重く受け止め・・・一早い事件解決を目指し―』

「何名もの警察官僚が心臓麻痺で死んでいるんですよ！？　このような事、キラにしか出来ません！　キラに裁かれたという事は、警察官による汚職が行われていたということではないんですか？！！」

『わ、私たちはキラによる殺人であるとは断定していない！！　警察の人間が汚職に関わっていたという報告も受けていない！』

会見をしていた警察官は司会進行役に目配せをしてそそくさと席を立った。

『本日の記者会見はここまでとします。本日はお忙し―』

「ふざけるな！キラによるものでなくて何だと言うんだ！！　待ってください、まだ質問が終わってません！！！」

もはや完全に日本はパニックに陥っていた。道行く人々、職場、学校、人が集まる場所ではキラ復活の話題で騒然としていた。

「間違いない。キラ様が復活したんだ。そして、腐り切った日本の官職にメスを入れたんだ！」

「しかし私は、以前のキラは犯罪の抑止のために正義の裁きをしていたと考える。これでは誰が殺されるか分からない。国中が混乱に陥るだけだ！」

「何を言ってるんだ。悪い事をしなきゃいいだけだ。オレ達はいつも通り生活してればいいんだよ！」

また、さくらテレビでは早くもキラ宛にメッセージを送る番組を放送していた。

『キラ様、あなたは直接人々にメッセージを送ることはできないはずです！　ここはまた、是非とも我が局を情報の発信源として、あなたの意思を発信させて下さい。さくらテレビは常にあなたの声を待ち望んでいます！』

『キラ様。あなたの声をお聞かせください！！』

『キラ様ー！！』

世界が驚喜と恐怖で奮い立つ中、ある男が着々と準備を進めていた・・・。

次回【piece.5 心労】

【 piece. 5 心労 】

「・・・ふぅ・・・。」

世界がキラの制裁の再開と共にパニックに陥っている最中、２代目ワタリことロジャー＝ラヴィーは忙しく動き回っていた。
厳重に守られた通信回線の準備が一段落ついたパソコンを前にして、ロジャーは手を口の前で組み、考え事をしていた。

（緊急事態だったこともあって準備がおろそかなままＩＣＰＯにＬがもう動き出していることを伝えてしまった・・・。その発言の中に問題はなかっただろうか・・・。）

ロジャーは先日のＩＣＰＯでの自分の発言を思い出した。

『ワタリ。まさかもうＬは動いているのだろうね！？』

恰幅のいい中年男性が机を指先でトントンと忙しなく叩きながらやや早口で問いかける。

『…犯罪者はおろか、世界各国の警察官までもが心臓麻痺で死亡している。早急な対応をしてもらいたいね』

男性は焦りを露わにし、ロジャーが答えるよりも先に疑問を言い放つ。

（以前のキラの時はＬ無しでは何もできなかったお偉いさんが今度はこの言い様…。私は子供の次に大人が嫌いだ。）

『Ｌは現在、捜査を始めるべく着々と準備を進めています』

ロジャーは小さく息をつき、わざと感情を押し殺しながら答えた。

『今回のキラは以前のキラと違い、現在どの国にいるのか見当がつきません。いずれ、皆さんに協力をお願いすることもあるでしょう。その時は、Ｌからあなた方に連絡が行くと思います』

『そ、そうか。頼むぞ…』

『それでは私はこれで失礼します』

ロジャーは無表情のまま会議の参加者を一瞥すると、少ない荷物を素早く片付け、足早にその場を去った。

（…問題は無い…か。だがキラと時間は待ってくれないだろう。）

『ピピピ…』

呼び出しの機械音と共に、画面のひとつに「Ｓ」の文字が現れた。

これは『Ｓｅｃｒｅｔ　Ｐｒｏｖｉｓｉｏｎ　ｆｏｒ　ＫＩＲＡ』

すなわちＳＰＫメンバーの一人、スタイナーからの通信である事を

示している。ロジャーはSの文字を確認すると通信モードに切り替え、マイクを口元に引き寄せた。

「スタイナー。準備は整いましたか？」

『はい。ケーブル配線、電力供給、建物内の安全装置、回線のセキュリティ全て問題ありません』

「分かりました。ではモニター数の確保とチェックをして下さい。」

『了解』

ピッと音をたてると、画面には元のデスクトップが現れた。
ロジャーはまた手を口の前で組み、考えていた。

（次は彼らに連絡をしなければ。リドナー、レスター、ジェバンニ…すぐに捕まればいいのだが。）

『ピピピ…』

（…今度はこちらか…）

画面には複雑な流線形を描いた『L』の文字が現れていた。

次回【piece.6 始動】

【 piece. 6 始動 】

「…ふぅ…」

一生の内で数少ないであろう貴重な休暇を、ジェバンニは存分に満喫していた。眼前に広がるビーチは多くの人達で賑わっている。ジェバンニはビーチソファに横になりながらお気に入りのシャンパンを持ち上げ、静かにグラスを傾ける。

「うむ、うまい・・・」

ジェバンニは飲んでいたシャンパンをテーブルに置き、「んっ…」と背筋を伸ばした後、ゆっくりと周りを見渡した。

（やはり休息は人間にとって必要だな…。いいな、時間がゆっくりしていて。）

ババババババ……

（白い砂浜……青い海……）

バラバラバラバラ……

（美しい女性……青い空……）

バラバラバラバラバラバラバラバラ……

（白い雲……黒いヘリ……、黒いヘリ！？）

バラバ、バラバ、バラバ、バラバ……

ジェバンニは場に合わない真っ黒なヘリコプターの存在にやっと気がついた。それは一直線にこちらに向かってくる。いまから砂浜に着陸でもするのではないかというほど低空飛行をするヘリコプターに、周りの観光客もざわめき始めた。

何事かとジェバンニが身を乗り出すと、ヘリのスピーカーから子供の声が聞こえてきた。

『ピー！　……あーあー、そこにいるのはジェバンニさんですね！？　僕はエリックです。Ｌの指令でジェバンニさんを迎えに来ました』

がさごそと音が聞こえてきた後、今度は大人の声が聞こえてきた。

『ヘリを操作しているアメリカ空軍の者です。責任を持ってお二人をお連れしますよ』

『……というわけですので、僕たちはホテル屋上のヘリポートでお待ちしています。荷物をまとめ次第ヘリに乗ってください！』

スピーカーからの声が聞こえなくなったときには、ジェバンニはタクシーに飛び乗り、ホテルへと向かっていた。

再び、日本。

「レスター殿、入りますよ」

「……」

襖を静かに開けると、住職である初老の男性が何か紙を持って現れた。質素な庭園を前に座禅を組んでいたレスターは、住職に気付きながらも全く意に介さず、ただ座して瞑想を続けていた。

「あなたのお国から電報が届いたようです。今日の座禅はもういいでしょう。お読みなさい」

「……」

住職に促され、ようやくレスターは目を開けて住職を見つめた。

「かたじけない」

すっかり日本に馴染んだレスターは電報を受け取った。

電報には『L』と書かれていた。

そして、ＳＰＫ本部。

「Ｌ、リドナーが到着しました。」

ロジャーがそう言った後、セキュリティが解除されたことを知らせる電子音が鳴ると、ドアから息をきらしたリドナーが駆け込んで来た。

「すみません！　連絡が上司のところで留まっていて……。到着が遅れました」

すでに到着していたジェバンニとレスターと目が合うと、二人は軽く頷いた。

「これで全員揃いましたね。」

細い体の青年は、三白眼で全員を見渡した。

（ニア）

（ニア……）

（ニア……以前と違い、青年という感じだ……）

捜査員全員が改めてニアの方を見た。ニアはちょっぴり身長が伸びて、顔も少しだけ精悍になっていた。

キラのことは来る途中で知ったが、ニアの顔を見ると現実味を帯びた緊張感が漂った。

警察の最後の切り札“Ｌ”

現状、ニアがそのＬなのだから無理もない。

女性を模したロボットのおもちゃを目の前に置くと、ニアはゆっくりと立ち上がった。ニアの周りには６体のロボットが綺麗に並べられていた。

「準備は出来ています。必ずキラを捕まえましょう。」

以前と変わらない乏しい表情と淡々とした口調。

左手にはお気に入りのロボットのおもちゃ。そして右手には板チョコが握られていた。

次回【　ｐｉｅｃｅ．７　初見　】

【 piece. 7 初見 】

キラ事件の再発。そして緊急招集により久々に再会したニア、レスター、ジェバンニ、リドナーの旧ＳＰＫメンバー。それに新たなメンバーが2名加わっている。様々なコンピューターや通信機器で壁までぎっしり埋まった特別室は静かな緊張感が漂っている。静寂が支配するその中で、ニアが玩具を操る音だけがカチャカチャと響き渡っていた。
部屋の入り口から一番奥、少し離れた所で2代目ワタリことロジャーが、口の前で手を組み、皆を黙って眺めている。

「・・・・・・」

久しぶりの再会と言っても誰も挨拶などをしようとする者はいない。皆はただ、淡々と玩具を操るニアを黙って見つめている。すると何の前触れもなく、沈黙を破るようにニアが話し始めた。

「…初めての方がいますね。紹介しましょう」

ニアはチラリと、眼鏡をかけた背の高い男性に視線を向ける。

「こちらはヨハン＝スタイナー。今後はスタイナーと呼んで下さい」

するとパソコンの画面に向かっていたスタイナーが立ち上がり、軽く頷いた。

「スタイナーにはＣＩＡの科学技術本部の協力でＳＰＫに加わって頂きました。後で詳しく説明しますが、今回のキラはコンピュータ

ーに強い人物です。彼の実力は部長の推薦ももらっていて信頼できます。コンピューター関係については彼に聞いてください。私も今、勉強しています」

「以前の事件も含めて、事情はすでに把握しています。よろしく」

スタイナーは答えた。レスター、ジェバンニ、リドナーは自分たちのこともすでに知っていると察した。

「この建物のセキュリティや安全な通信回線についても、スタイナーとワタリでやっておきました」

（・・・スタイナー招集の許可をもらうのは本当に大変だった・・・。Ｌは知らないようだが）

ニアが淡々と話している中、手の中でむにゃむにゃと口を動かしながら、ロジャーは心の中で呟いた。

「そして彼がエリック＝ウォルトン。エリックと呼んで下さい。私がワイミーズハウスから引き抜いてきました」

「！　エ、エリックです・・・。よろしく・・・」

突然ニアから紹介され、エリックはびっくりして答えた。
エリックは１４才。色白で黒髪、華奢な体で、目の色が蒼くなければ端正な顔の日本人の少年にしか見えなかっただろう。
元々そういうデザインのものなのか、沢山ポケットのついたハーフパンツに、上は白黒ボーダー柄の長袖シャツを着ていた。

さらにニアは、レスター、ジェバンニ、リドナーを順に見つめた。

「そして彼らが以前にキラ捜査の協力をしてくれた旧ＳＰＫメンバー、右から順にレスター、ジェバンニ、リドナーです」

三人はその場で一様に頷いた。

「そして申し遅れましたが、私がこのＳＰＫを取り仕切る“Ｌ”です。・・・と言っても、今まで通りニアと呼んでいただいて構いません」

ワイミーズハウスにいる全ての子供の憧れ“Ｌ”

そのＬにエリックは初めて対面し、驚きと興奮を隠せずにいた。

（こ、この人が・・・Ｌ・・・！！）

エリックは微動だにせずにニアを見つめた。

（・・・・・私がＬだから緊張しているんですね・・・）

ニアはエリックの気持ちを察した。

それと同時に、ニアが初めて“Ｌ”に会ったときを思い出していた

――――

「・・・以上。二人の成績は今回も素晴らしいものでした。今後も勉強に励みなさい」

「分かりました」
「はい・・・」

初代ワタリであるキルシュ＝ワイミーは二人の成績優秀者にテストの結果を渡し、静かに微笑んだ。その二人とは、まだワイミーズハウスに入って数年の、ニアとメロである。
メロはもうニアを敵視していたし、ニアはその視線を感じつつも、白いジグソーパズルのピースを額にはめ込んでいた。
このテストでもニアが一番だったらしく、メロはニアの成績表を気にしていた。メロは自分のテストの答案用紙に目を落とし、多くの○印の中の、たった1つの×印の上で目をとめた。

（・・・クソっ・・・・・・・・・）

その時、ドアの外で足音がしたと思うと、ノックもせずに一人の青年が入ってきた。

「ワタリ、この事件の被害者についてなんですが・・・・・・」

よれよれのジーパンに白い長袖のシャツ。白い肌に黒い髪。
そしてどんな細かいことも見逃さないであろう瞳の周りには真っ黒なクマができていた。

その男が、細長い指で汚いものを触るように一枚の紙をつまんで持ちながらワタリに話しかけていた。

（？・・・・誰だこの変な人は・・・・・・）

メロは怪訝そうにその男を見つめた。
ニアはちらっとだけ見たが、自分とは関係ないと思い再びパズルに目を落とした。

「・・・ああ、二人は初めて会うのだろうね。いや・・・それは当然だが」

ワタリはメロの怪訝そうな顔に気づき、その男をニアとメロに紹介した。

「彼が“L”だ」

「「っ！！！・・・・・・・・・・」」

突然の紹介に二人は驚いた。
メロはびっくりして2、3歩後ろに下がり、ニアは持っていたピースをパラパラと取りこぼしていた。キルシュ＝ワイミーは優しい冗談を言うことはあっても、決して嘘はつかない。嘘をつくくらいなら、秘密を守り続ける人間だった。この人物がLであるという冗談は冗談にならない。したがってこの人物は本当にLである。そんなことは、二人の成績優秀者には簡単に導き出せることだった。

「？・・・・なるほど。ではこの二人がニアとメロですね・・・・・・二人のことはワタリから聞いていますよ。とても成績が良いと」

驚いて固まってしまった二人をよそに、Lは人差し指を銜えながらニアとメロの顔を交互に見つめた。

（（・・・・こ、この人がL・・・・！！））

「・・・・二人とも頑張って下さい・・・。私に何かあったら、その跡を継ぐのはきっと二人のうちのどちらかになるでしょうからね」

そう言うと、Lはにっこりとしながら二人を見た。

Lはこんな冗談を言っていたが、この場にいる誰が、この後10年と経たないうちにこの一人の天才が凶悪な犯罪者に殺されてしまう

ことを予測できただろうか。
しかもLが天才であるが故に孤独でありながら、唯一自分と同じレベルであると感じた人間に――――

「・・・・・・まぁ、そのうち慣れるでしょう。あなたには期待しています」

ニアはエリックに話しかけた。

「エリックの成績は他の子よりも頭一つ飛び出していましたし、もう充分実践でやっていけるレベルです。自信を持ってください」

「はいっ・・・・・」

エリックは唇を軽く噛み締めた。

（・・・まだ何者かは分からない・・・が、確実にキラは再び現れ

た。以前のキラがやっていたことの無意味さを知りながらなお殺人をしようというのか？・・・・だがどうしてまたデスノートが現れた？・・・いや、「何故か」「どうやって」はもう関係ない。凶悪な殺人鬼がまた現れ、人の命を奪っている・・・。キラ・・・・刺し違えてでも私はキラに勝つ。必ず。必ず・・・・）

ニアは、決意を新たにしつつ、何か言いようのない漠然とした不安を感じていた。

（・・・・・・・・・）

ロボットのおもちゃを弄りながらそんなことを考えていたニアを、スタイナーは人知れず冷めた目で見下ろしていた・・・・。

【ｐｉｅｃｅ．８　指針】

【 piece. 8 指針 】

「到着したばかりで申し訳ありませんが、ジェバンニとリドナーには今日中に日本に向かってもらいます」

ニアの捜査がとうとう始まった。
エリックはニアの声に耳を傾けながら、『欲しい物リスト』と書かれた紙をロジャーに渡し、何か相談をしている。

「日本へ？」

「それはやはり・・・前のキラのことで？」

リドナーとジェバンニはニアに質問をした。

「半分当たっています。スタイナー、被害者リストを出してください」

（（半分・・・？））

リドナーとジェバンニはその意味を考えながら、被害者リストが映し出された主モニターに視線を移した。

「具体的な指示の前に、キラについて現段階で分かっていることを説明します」

ニアはスタイナーから手渡されたノートパソコンを使い、自ら説明を始めた。
エリックも主モニターの前に戻ってきていた。

「現在のところ、キラからの声明文や犯行予告等は出ていません。当たり前かもしれませんが、被害者が死んでいた現場にもキラに結びつくものはありませんでした」

「被害者の国籍、住所、性別、年齢、職業・・・・どれを取っても共通性は無いな・・・・だがあの時の彼らが被害者に・・・・・・」

ジェバンニは冷静に被害者リストを見ていたが、表情は強張っていた。リドナーは言葉を飲み込んでしまっていた。
夜神月は犯罪者や目をつけた警察官を殺していたが、今回はそうではない官僚級の警官までもが心臓麻痺で死亡している。だが、死亡した警察官の中に相沢周市、伊出英基、模木完造、松田桃太の名前も載っていたのだ。

ニアは頭の中でこの件に関して再思考を始めた。

（Ｍｒ相沢は日本捜査本部の置かれたビルの近くの公園で首吊りによる窒息死。Ｍｒ伊出はＭｒ相沢と向かい合うような状態で同じく首吊りによる窒息死・・・・。Ｍｒ模木はビルの屋上から飛び降り、頭を強打して死亡。松田は同じビルの近くの橋から落下して溺死・・・・・・・・・・・・・仮に松田は本当に間違って橋から落ちたとしても、相沢に伊出に模木・・・ありえない・・・これは確実に狙って殺している・・・・・・）

「ジェバンニの言ったとおり、前のキラ事件時の日本捜査本部のメンバーがキラに狙われて殺されました。キラはキラらしくあるために犯罪者を心臓麻痺で殺していく一方、警察官であっても汚職事件に関わったなどの場合は殺していきながら、前のキラの敵を取るかのように４人を殺しています。４人がキラ事件の捜査を担当してい

たことは私たちを含む一部の人間しか知りません。つまりキラは前のキラの真似をしている等というレベルではなく、前のキラとその周辺について、調べるのがかなり難しいことまで調べ尽くしたレベルのキラです」

「だから今回のキラはコンピューターに強い人物なんですね・・・」

ニアの言葉にエリックが独り言のように呟いた。

「はい。証拠を残さない高度なハッキングのできる人物でなければ得られない情報があります。まだ分かりませんが、おそらく足が付かないようにいろんな国を経由してきているでしょう」

「それより、確認しておきたいことがあります」

エリックは学校で生徒が質問するときのように、手を耳の高さまで挙げた。

「・・・何でしょう、エリック」

ニアは『たぶんあのことだろう』と思いながら、エリックに質問を促した。

「今回の犯人は『キラ』と呼んでいいのですか？」

ニアとエリック以外の人は皆、この質問に驚いていた。

「ど、どういうことだエリック？」

「まさかこの殺人がデスノートを使わずに行われているとでも言うの？」

「いや、待つんだ」

ジェバンニとリドナーが捲くし立てているのを、レスターが制した。

「見たところ、ニアはこの質問を予想していたようだ。少なくとも、ニアとエリックの二人は私たちが考えていないところまで考えている。二人の話が全て終わり、それでも質問があればまとめてすれば良いだろう」

レスターはそう言うと、ニアの方を見た。ニアもレスターの方を見ると、小さく頷いた。

「やはりあなたを呼んだのは正解でした。レスター指揮官」

ジェバンニとリドナーはニアの方に向き直った。

「・・・殺人は確実にデスノートによって行われています。そして今回のキラは、今のところ敵ながらよくやっています。世界中の犯罪者とそのレベルを事細かに調べてきっちり順番に心臓麻痺で殺しています。先ほども言いましたが、これはデスノートを手にした者がキラの真似事をしているという程度のものではありません。ですからキラと呼んでいいと思いますが・・・・そうですね、あえて別の言い方をするならば・・・Ｆｏｌｌｏｗキラ、Ｆキラとでも呼べばいいでしょう」

そしてニアは板チョコをパキッと齧ると、口をモゴモゴさせながら

「しかし今後・・・余計な殺人を始めたら・・・唯のヘタレだと言って罵ってやりましょう」と言った。

（・・・・・完全になめているな・・・こんな若者がＬなのか・・・？）

スタイナーはまた冷めた目でニアの細い背中を見下ろしていた。

「それから―」

チョコを飲み込むと、またニアが話し始めた。

「今回の事件は、特に興味があって捜査をすることを決めた訳ではありません。たしかに今回のキラ・・・Ｆキラはキラとしてよくやっているようですが、殺人方法や凶器の詳細が割れている今では、これと言って期待できるパズルではありません。しかし、現在の被害者リストを見て分かる通り、Ｆキラは以前のキラのことを事細かに調べています。そして日本捜査本部の４人を殺しています。では何故、私たちの情報は掴めず、殺せなかったと思いますか？」

リドナー、ジェバンニ、レスターはお互いに顔を見合わせたが、首を振り合うだけだった。

「・・・それは私が直接保護をかけていたからです。キラ事件当時、キラ信者たちの崇拝ぶりは無視できないものでした。私たちＳＰＫ・・・特にＬ・・・これは私ですから心配はいりませんが、捜査員への復讐が、事件解決後の一番の懸念事項だったんです。ですから、３人がキラ事件に関わっていた事実が外にもれないよう、ここ数年間ずっと私が手を回していました」

（そうだったのか・・・日本捜査本部の捜査員たちは、ニアの見えないところで情報がもれていたか、あるいは・・・・）

ジェバンニは被害者リストの中の４人の名前を再度見ると、同じ事件で戦った仲間が亡くなってしまったような、寂しい気持ちになった。仲間といっても、殆ど敵に近い時が主だったが・・・。

「・・・以上のことから、少なくともＦキラは私たちを探しています。私がＬだと分かれば殺し、仲間がいれば当然それも殺すでしょう。飛びかかる予定の火の粉は、避ける準備をしなければなりません。今回のキラも油断は禁物ですよ。それでもこのまま捜査をしますか？」

ニアは前のキラの時も、事件の後も、捜査員のことをよく考えていた。ニアのおかげで今自分が生きていると言っても過言ではないことを、レスター、リドナー、ジェバンニはしっかりと感じていた。３人は力強く頷いた。

（捜査員から信頼される理由は何なんだ？・・・・・・まだ見えてこないな・・・だが私は死なない。自分の情報だけは守りきる自信は・・・ある）

スタイナーはキーボードの上の自分の指を見つめながら思った。

「それでは指示を出します。まずリドナーは日本に行き、この２名とその近辺を探ってきて下さい」

主モニターには夜神月の母、夜神幸子と妹の夜神粧裕の名前と写真が映し出された。

「考えにくいですが、夜神月が家族に自分の跡を継がせる。０％ではありません。ただ、この２名に先ほど言ったようなハッキング技術が無いと思われること、跡を継ぐならこれだけ期間をおく理由が無いことを考えるとまず無いとは思いますが・・・・念のためです。日本捜査本部とのコンタクトぐらいはあったかもしれません。次に、ジェバンニにはこの男にコンタクトをとってもらいます」

幸子と粧裕の写真の上に、日本捜査本部の生き残り、山本大（やまもとひろし）の名前と写真が映し出された。

「驚くべきことは、Ｍｒ山本は前のキラ事件には関わっていなかったという細かい点までＦキラは調べているということです。Ｍｒ山本が生きているということはそういうことになると思いますが・・・Ｍｒ山本なら、日本捜査本部４名を殺すことは簡単です。しかしそれでは自分が犯人だと言わんばかりの行動であることと、これも先ほどのハッキング技術のことを考えれば可能性が低いです・・・」

「彼とコンタクトを取って、どうすればいい？」

「ここに連れてきて下さい。彼とは面識はありませんが、日本捜査本部のメンバーと一緒に行動することが多かったこと、そして私とパソコン越しながら話したこともあります。余計なことをしないうちに、容疑者兼重要参考人兼捜査員として連れてきて下さい。余計なことをすれば、こちらの情報と彼自身の命が危ないですから。可能性こそ低いものの、彼らがＦキラである可能性はあります。慎重に行動してください」

「「了解」」

その日の夜、ニアは一人でミルクパズルを組み立てていた。
パチッパチッというピースをはめる音が部屋に響いていた。
ニアの脳裏にはある映像が浮かんでいた――――

ニアはいつのまにかそのミルクパズルを持っていた。
小さいニアは背中を丸めてミルクパズルに没頭していたが、パズルをはさんで向かい側では、一人の少女がニアとパズルを交互に見て微笑んでいた。ニアは5歳からの記憶は全て、ビデオカメラで撮影されたように覚えている。そのときの音でさえ記憶していた。ただしそこから4歳、3歳と遡っていくと、次第に映像がぼやけ、部分的に記憶が欠けていき、音もまばらになってしまう。この記憶はいつの時の記憶なのか、もうニアには分からなかった。少女の顔はぼやけていて、判別は不可能だった。声も全く思い出せなかった。

小さいニアはパズルを完成させると、ニッコリと笑ってその少女の顔を見た。少女の顔を思い出すことはできなかったが、少女はニッコリと笑うと、ニアの頭を優しく撫でた。その感触すら思い出すことはできなかった。

――――ニアは目を開けると、残りのピースを着々とはめ込んでいった。

（・・・また思い出せなかった・・・・・・あの少女は一体・・・・・・・・・・・・・・）

パチッとピースをはめると、ニアは自分の指を見つめた。パズルの大きさは変わっていなかったが、ニアの指はもう子供のそれではなかった。

次回【piece.9 声】

【 piece. 9 声 】

プルルル・・・プルルル・・・

窓の外を眺めながら考え事をしていると、静かな部屋に電話のコール音が響いた。

「はい」

『先生、予定していた方がいらっしゃいましたが・・・』

受話器を取ると、受付の女性が少し焦ったように話してきた。

「通して下さい」

『分かりました。しかし、その・・・』

「構いません。この部屋に通して下さい」

『分かりました・・・ご案内します』

受話器を置くと、大きな窓の前に戻り、外を眺めながら先ほどの続きを考え始めた。

（・・・キラは死んだ。これはほぼ確実だろう・・・世間ではまだキラは生きていると考えている者もいるようだが、それはない。キラは今の世界を見ていながら、休んだりはしない。何がしか行動を

起こし、何がしか結果を出す。だがキラほどの人間を死に追いやったLの実力も素晴らしいものがある・・・それほどの実力を持っていながら、なぜ探偵などというつまらないことやっているのだろうか・・・・・・・・。キラを死に追いやったのはLではないのか？・・・・・・・・一体Lとはどういう人物なのだろうか・・・・・。だがもしキラを死に追いやったのがLならば、その実力・・・・・欲しい・・・・・なんとか私の下に置けないものか・・・・・・だがもう因子は用意してある。きちんと感染すれば、こちらの意向で発症させることはできる。しかしまずは・・・・）

コンコン、とドアをノックする音がした。

「どうぞ」

（かませ犬で腕試しとしよう・・・）

一人の人物が、ドアを開けた。

「L、リドナーから電話です」

ニアはロジャーから変声機つきの携帯を渡された。

「キーは？」

『ＰＡ　０８００　７７６１　９０３０　６９６１　９７９５』

ニアは携帯を操作して変声機を解除すると、もう一度携帯を耳にあてた。

「Ｌです」

「リドナーです。日本で夜神母子に接触しました」

「予定より早く接触できたようですね。二人について報告してください」

ニアは大量のミカンをピラミッドのように積みながらリドナーを促した。

『はい。前回のキラ事件時以来、茫然自失状態だった夜神月の妹夜神粧裕ですが、母夜神幸子の献身的な看病によって２０１２年に回復し、大学に戻っています。現在は大学に出ている間以外はずっと母親と行動を共にしているようです。今のところ怪しい動きはなく、現実を受け止め、前向きに生きようとする親子としか私には・・・・・』

（・・・二人の中では夜神月と夜神総一郎はキラによって殺されたということになっている・・・家族が二人いなくなったということがあれば当然・・・・か・・・）

「・・・尾行はバレていませんね？」

『はい。問題ありません』

「分かりました。もう少しだけ監視を続けたらこちらに戻ってきてもらいます。指示があるまでは二人の尾行を続けてください」

『了解』

電話を切るとすぐに、今度はモニターに「G」の文字が現れた。これはジェバンニのことである。今度は直接、ニアがマイクに向かった。

「キーを言ってください」

『ＳＩ　１２１９　０５７０　８１６９　５３９１　１１５２』

ニアはまた簡単な操作で変声機を解除すると、マイクに向き直った。

「Ｌです」

『こちらジェバンニ。Ｍｒ山本との接触に成功しました』

「そうですか。あなたも優秀な捜査員であることは間違いなさそうです。続けてください」

形の良いミカンを物色しながら、ニアはジェバンニを促した。ダンボールには「愛姫の姫ミカン」と書かれている。ニアはもの凄い速さでミカンをより分けている。

『まずＭｒ山本は日本捜査員４名の死亡時、特に変わったこともなく捜査本部を後にし、翌日通勤後に４名の死亡を認知。その後は日本警察の通常業務だけに従事していたようです』

「Ｍｒ山本とＬとの繋がりは日本警察関係者には知られていますか？」

『私が調べる限り、いつものメンバー以外には知られていません』

「Ｆキラ以外は・・・ということでしょうね」

『・・・・・』

「分かりました。ジェバンニはなるべく早くこちらに戻ってきてください。今からLの権限でＭｒ山本を回収します。Ｍｒ山本と接触するあなたに連れてきてもらいます。連れてくるまでの間は状況をなるべく細かく報告してください」

『分かりました』

ニアは電話を切るとすぐにレスター指揮官に日本の警視総監に連絡をするように指示を出す。

（ジェバンニがすでに操られている可能性も考えられます。しかしＭｒ山本がキラであるかどうかは私と相対するまでに私が判断するので問題ないでしょう）

「L、警視総監に繋がりました」

電話を切ったニアに、レスターは新しいイヤホンマイクを渡した。ニアはマイクに向かって淡々と言葉を述べた。

「お久しぶりです総監。Lです。あなたのパソコンに表示させた人物一名をとある事件の重要参考人としてこちらで回収します。この情報は秘密厳守でお願いします。もちろんこの会話データもこちらで消させていただきます」

相手の言い分もあまり聞かず、ニアは何でもないようにマイクを切った。

「・・・ところで今日はエリックの姿が見えないが・・・」

ニアからマイクを受け取りながら、レスターは辺りを見回して言っ

た。
ニアの電話対応の淡白さにも、レスターは慣れてしまったようだ。
「・・・・確かロジャーに頼んでいたものが準備できたと言っていたので、そこにいるんでしょう。あれで集中できるというのは、私には理解できませんが・・・・」
そう言うとニアは新しいミカンピラミッド作りに取り掛かった。
「はあ・・・・・？」

ロジャーが用意した部屋にエリックはいた。
ワイミーズハウスにいた時にたまたま受けた拳法の指導で紹介された酔拳をすっかり気に入ってしまった。それから考え事や集中力を高めたいときには、何もない広い部屋で酔拳をしていた。もちろんお酒は飲まないので、『酔拳演舞』というべきなのだろう。
（・・・キラの目星がつくまではともかく、キラと相対する形とな

れば、基本的にそのキラへの対応の仕方はＬから細かく指定がされるはず）

エリックはふらふらとしながらも、力を入れるべきところでは最小限の力を入れながら舞っていた。もう体が覚えてしまったことをするだけなので、思考の邪魔にはならなかった。

（キラの能力はどの程度かはまだ未知数。しかしニア・・・Ｌの能力レベルはボクの予想を上回ってる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）

突然エリックはパタンと床に倒れた。酔拳にはよくあることである。倒れるのさえ攻撃のひとつでもある。そんな酔拳の自由さがエリックは好きだった。

（・・・決めた。Ｌとしてキラと相対すること、Ｌとして事件の謎を解くことはどういうことなのか、それを見る。そうしながら、ボクはボクで好きなことをすれば良い。Ｌにやめろと言われたらやめたら良い・・・・・・・難しいことじゃ無い）

エリックは目をつぶった。

（・・・今、キラとＬは何を考えている・・・？）

次回【piece.10 光】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9169d/

『 DEATH NOTE －the Near relative－ 』

2010年10月9日15時05分発行